音楽で創る「わ」

音で明るくするキャンパス

「音楽に関わる仕事をしたい！」と考えたとき、皆さんはどんな進路を思い浮かべるでしょう。その選択肢の中に、香川大学教育学部の「音楽領域」はあります。

「音楽を職業に生かすのは、たやすいことではありませんが、教職を通じてその能力を発揮するのは良い方法ではないでしょうか」。そう語るのは、香川大学で音楽領域を指導し、アジア・フルート連盟理事もつとめている青山夕夏教授です。

先生は、ドイツ、フランスへの留学経験をもち、ドイツのオーケストラで活動するほか、各国の「フルート・リサイタル」で演奏してこられました。ヨーロッパでの生活の中では、音楽が人々の日常生活に息づいている様子や、政治情勢の不遇な環境でなお、自らの持つ無形の伝統を真摯に継承しようとする数多くの芸術家の姿にも接したといいます。また、近年は中国、韓国などアジア地域での演奏や交流活動を通して、近代以降、欧米の音楽を追い求めていた頃とは違う、西洋を離れた東アジア地域に新たな音楽のあり方が芽ばえ始めていると感じるそうです。

「大学は学生が学ぶ場であると同時に、地域の文化的な面を支える使命を持っている」ことを先生は強調します。

その中で学内では、学生たちの名手が集う「キャンパス・ランチ・カフェ」などのコンサートも企画されました。演奏する側には、才能ある多くの学生同士が音楽を通して知り合う機会を、聴きに来る学生には、キャンパスの中で居心地よく過ごす場所と時間を作ることを目的に、昼休みの時間を利用して開催されるコンサートです。

学外では、今年度4回目を迎える「わくわくコンサート」で、学生たちが組織する実行委員会を支援しています。青山研究室が特別支援学校でボランティア演奏を行ったときに、子どもたちと保護者から、行く機会の持てない大きなホールで「音楽が聴きたい」という声を耳にしたことをきっかけに始まりました。今では学部やサークルを越えて組織された学生たちの実行委員会が活動の中心となって運営しています。「コンサートは、演奏のみではなく、広報、プログラム作成、聴衆の誘導など、様々な役割がひとつになって成立するものです。そうした実体験を通じて学生たちも多くのことを学ぶことができます。また、学内の教職員の協力も得て、専門家が集う大学ならではの強みを生かしています」

また当コンサートは、毎回テーマを設け、演奏を聴くだけでなく、プログラムの内容に合わせて設定されたテーマに関するレクチャーに参加できるなど、それぞれの興味に合わせた楽しみ方ができるよう工夫されています。

音楽は私たちの心を豊かにします。多くの人が音楽を享受できる場を青山教授は大学内外で提供し続けています。

KEYWORD

［ 音楽領域/教育学部 ］

VITA BREVIS, ARS LONGA
人生は短し、技芸は長し。
音楽領域は、器楽・声楽・作曲・音楽理論・音楽史の教科内容の分野と学校での音楽教育の授業実践に関わる分野から構成されています。実技力を礎に、豊かな情操を育む教育実践力を有し、学校教育教員及び広く教育界で活躍できる人材の養成を目的としています。

青山夕夏

PROFILE

あおやま　ゆうか
教育学部　音楽領域
教授
専門分野：器楽（木管楽器）
フルート

第2回 わくわくコンサート。「音楽とダンス」のテーマで「ボレロ」などを演奏しました。

「第3回 わくわくコンサート」実行委員会の学生スタッフたち。みんないい顔をしています。

商店街の真実

『商店街が衰退している』というお話を、みなさん一度は聞いたことがあるでしょう。では、どうすれば商店街は賑わいを取り戻すでしょうか？『お客さんに合わせてお店を変えればいいよね！』と思うかもしれませんが…

「昔からのお客さんもいるから店を急には変えにくい。お店の方も年金世代でリニューアルする体力もない。『静かに暮らしたい』というのが一番の希望です、という場合もあるんです」

そう、原因はひとつではないのです！

「日本各地の商店街は、祭りなどで人々の交流の場となる貴重な場所ですが、現代は近所づきあいも希薄で、生まれ育った場所への思い入れも起こりにくい。商店街は衰退する一方です。『コミュニティを担う商店街を守れ』という理想論は重要ですが、商店街が『ビジネスの場』として競争力を持つためにはどのような枠組みを作らなければいけないのか考えることも必要です」

小宮一高准教授のお話は、耳に心地よい「地域活性化」という言葉では見落としてしまう、商店街の発生や発展の歴史をふまえた説得力に満ちていました。

小宮准教授の専門は、生産者から消費者へ到るまでのモノの流れを研究する「流通システム論」。その中でも、お店が集まった地域である「商業集積」について研究しています。商店街は商業集積の代表的な形。現在、小宮准教授は学生とともに観音寺市の商店街の研究を行っており、商店街で企画されるイベントに協力しながら、地元の人達が議論するときの資料にもなるようにと調査や記録を続けています。

その場所に出店した理由やお店の方の体験を伺い、場合によっては電話帳や住宅地図、地域誌も資料にする。そんな地道な調査の中から商業集積の歴史は姿を現します。小宮准教授はデータを集め「外からの目」で分析することで、商業集積にいい循環をもたらすには何が必要なのかを理論化しようとしているのです。

「現実の中で何が起こっているかじっくりと観察し、いろんな観点から物事を理解できるようになるのが、大学で学ぶ意義のひとつだと思っています」

身の回りで起こっていることを冷静に受け入れ、思い込みにとらわれない客観的な視点を持てたとき、学生は生き方を変えるきっかけもつかみます。

「最近の学生の中には、『社会が悪い。政治が駄目…』といらだつ子も多い。そして、同時に諦めに似た気持ちも持っています。彼らは社会がうまく回っておらず、ムダなことばかりと考えている。本当はそうなるだけの理由があるのですが、そこは深く考えない。例えば商店街の個人店でも『アンケートをとってリサーチしてからお店をやればいいじゃないか』と直線的に考えてしまう。でも、安易にやると『コンビニ』の出来損ないになってしまいますよね。流通・商業は身近な存在ですが、深く考えないとわからないことが多い。『生産者と消費者の間にどうして商店が存在しているの？』とか。勉強になりますよ」

学生の視野を広げようと、小宮准教授は講義の前に本を一冊紹介しています。自分を取り巻く要素からテーマを見つけ、じっくり観察し、考える。それは学問だけでなく社会との関わりにも必要なこと。経済を学んだ時、あなたの目には違う世界が広がっているかもしれません。

学生たちが、商店街でイベントをおこなうアーティストのお手伝いをしてます。観音寺市の商店街にて。

アーティストに取材をする小宮准教授と学生たち。この時は、商店街の空き店舗がアーティストのアトリエになっていました。

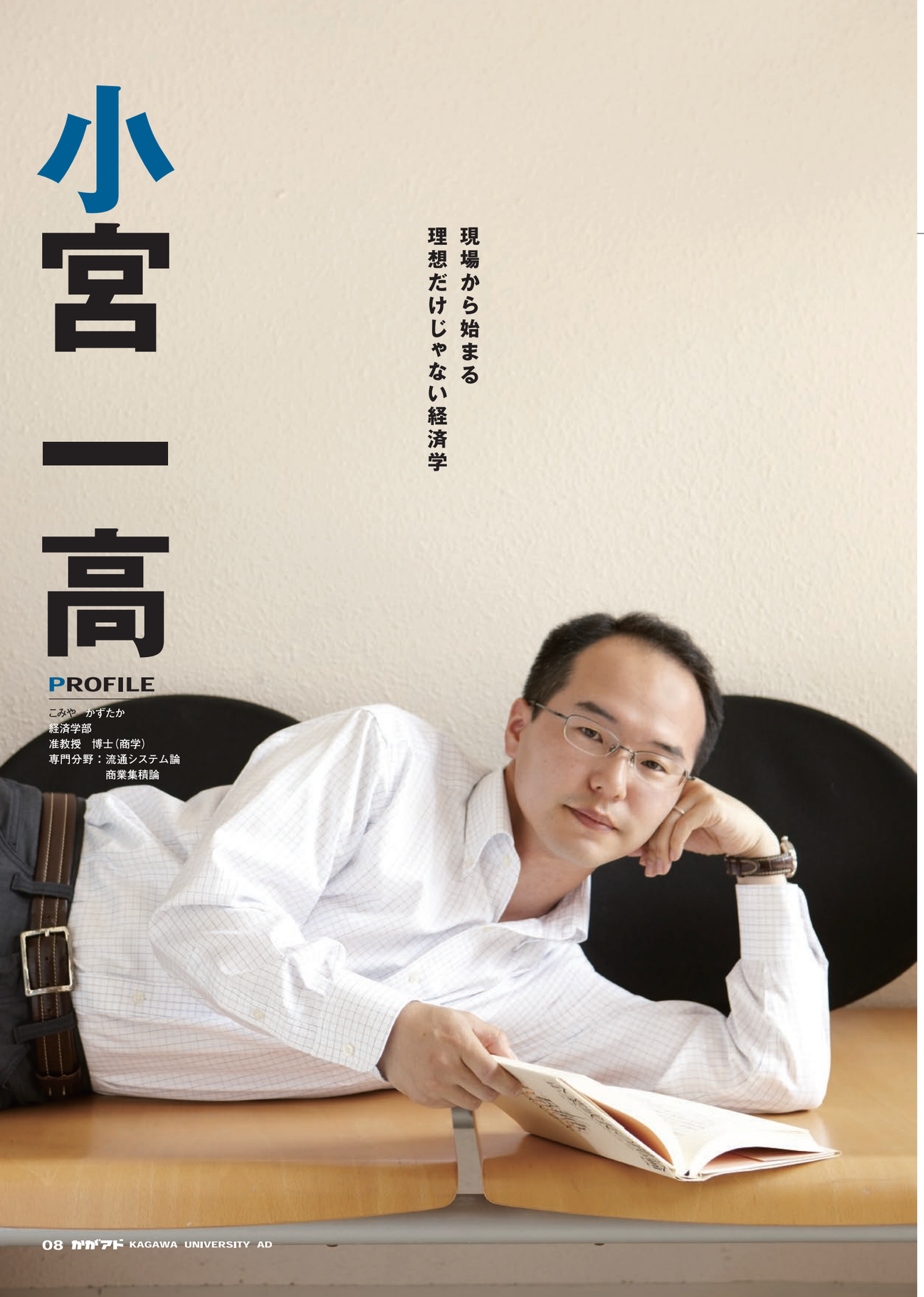
KEYWORD

［商業集積］

小売業やサービス業の店舗が多く集まっている地域のこと。商店街は自然に形成された商業集積であり、主に郊外に立地するショッピングセンターは、計画的につくられた商業集積である。

小宮一高

現場から始まる 理想だけじゃない経済学



PROFILE

こみや　かずたか
経済学部
准教授　博士（商学）
専門分野：流通システム論
　　商業集積論

患者を支える看護師

看護師をバックアップして糖尿病患者の生活の質を高める

糖尿病療養指導士（CDEJ）の資格を持つ看護師や、糖尿病看護に関心を持つ看護師が集まった香川県糖尿病療養指導士看護ネットワーク「Qの会」という組織があります。医学部看護学科の野口英子助教は、約5年前から組織に参加し、現在はその理事として忙しく走り回っています。

「Qの会」は、香川県下の看護師なら誰でも参加できる組織で、会員同士の経験的な知識を共有したり、専門の知識や技術に磨きをかけて、糖尿病看護の実践能力の向上を目指しています。会員は現在108名。医師ではなく看護師が中心という点でも、特別な存在です。

そもそも、野口助教が会に参加したきっかけは、会を立ち上げた宮武陽子会長から直接誘われたから。とは言え、看護師として現場にでているわけではない野口助教が、会について興味を覚えたのは、修士課程での経験が影響しています。修士課程時代、野口助教が研究していたのが小児糖尿病。この時に、多くの患者さんやその家族と接し、糖尿病ケアの大切さについて理解していました。宮武会長の話を聞き、「現場に出なくても、患者さんのためにやれることがある！」と直感した野口助教は、立ち上げ間もない会に参加したのです。

会の活動は、主に土日。会員は、休みを返上して参加することになるので、その意識の高さが伺えます。会員のモチベーションに応えるよう、会では定期的に研修を行い、看護のスキルアップに努めています。爪の切り方やフットケア（血流改善）、食事指導など、糖尿病患者のための特別な技術の研修が中心で、専門的な技術を学べる県下では貴重な場所ともなっています。

また、啓蒙活動も会の大切な役目のひとつ。CDEJの資格を持つ看護師が、糖尿病の看護にあたっていないという状況を改善しようという働きです。

というのも、総合病院では看護師の担当が持ち回りになることが多く、せっかくの資格が生かせないケースがあるのです。病院内のルールを尊重しながら、野口助教たちは、資格の意味と生かし方を訴求しています。

ところで、糖尿病の看護に対して、看護師たちがこれほど真剣になるのはなぜでしょうか？糖尿病の患者さんは普段の生活を改善する必要があるので、指導や対話が重要です。つまり、患者さんの相談役である看護師の役割が、ある部分では医師より大きいのです。

「生活というのは、人それぞれ違います。生活習慣の見直しが必要な場合、病院での一般的な説明だけでは限界があるんです。患者さんが実際に生活していく中で生じる様々な状況に対して、適切なアドバイスをするのは看護師の仕事。だからこそ、糖尿病に関心の高い看護師が会に興味を持ってくれるのでしょう」

「Qの会」のQとは、「Quality of Life（生活の質）」の頭文字。糖尿病を持ちながら生きる患者さんとその家族の、生活の質を高めることを願って名付けられました。「患者さんの支えとなる看護師を、よりよくバックアップしていきたい」。そんな野口助教もプライベートでは一児のママ。子育てで忙しい毎日ですが、今後は他のグループとの連携を深めたいと語る姿が印象的でした。

KEYWORD

日本糖尿病療養指導士
（CDEJ : Certified Diabetes Educator of Japan）

糖尿病とその療養指導全般に関する正しい知識を有し、医師の指示の下で患者に熟練した療養指導を行うことのできる医療従事者（看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士の資格を有する者）に対し与えられる資格。

野口 英子

PROFILE

のぐち　えいこ
医学部　看護学科
成人看護学
助教
専門分野：糖尿病看護
　　看護技術教育

「Qの会」の研修のようす。「Qの会」は看護分野での地域貢献活動としても注目されています。
ホームページhttp://www.qnokai.org/

「Qの会」総会。右端が野口助教。「小児糖尿病患者にもCDEJが活躍できたら…と思っています」ママとしての実感も生かされています。